



平成28年12月14日(水) 於：佐倉市社会福祉センター 地下研修室
第3回運営委員会の第2部にて研修会を開催

『熊本災害支援 現地からの報告』

お話：杉山 美枝子さん(佐倉市社会福祉協議会 まちづくり推進班)

細谷 聡美さん(同 佐倉市ボランティアセンター)

◆熊本地震の概要◆

4月14日(木)午後9時26分ごろ、M6.5の直下型地震で益城町は震度7、熊本市などでは震度6弱。

4月16日(土)午前1時25分ごろ、M7.3 震度7の本震が発生。

熊本県内だけに限らず九州全体に大きな揺れがあり、各地でライフラインが絶たれ多くの方が避難した。県内95,000人(益城町11,000人)が避難所生活を余儀なくされた。



熊本地震ボランティア活動

佐倉市社会福祉協議会
まちづくり推進班
杉山美枝子さん

日本介護支援専門員協議会からの依頼で、自宅にいる高齢者の実態把握調査のお手伝いとして益城町に6月26日(日)~30日(木)ボランティアとして入る。職場には特別休暇を4日間もらい、飛行機(格安チケット7,000円)で成田から熊本へ。熊本市北区に、お部屋を無償で貸してもらった。

現地入りした6月下旬避難所生活者、県内6,600人(益城町2,000人)。屋根瓦が落ちたり、押しつぶされた家が多く、特に寺迫交差点付近の被害が大きかった。現地の人達は、危険な状況の中でも生活し続けなければならない大変さを知った。

益城町総合体育館で総合相談窓口(介護相談、色々な手続き)を担当。相談者はあまり来なかった。YMCA、JRAT(リハビリの団体)、DMAT(ドクター、看護の団体)、社会福祉士会、介護福祉士会、日本介護支援専門員協議会、行政、ボランティア(一般)が活動。各機関のTPOを合せていくのが大変。

段ボールの柱を使い2畳分の空間をカーテンで仕切り生活していた。静かすぎて怖い感じがした。コミュニケーションがとりづらい、これだとプライバシーは守れても壁を作っていると感じた。地震から2か月半が過ぎ、被災者の方は疲れがたまっていた時期だった。イライラ(歯ぎしりなど)ちょっとしたことでクレームが多かった。良い点としては、認知症の方がウロウロしていたが、みんなで面倒を見ていた。

午後は益城町の包括支援センター(ひろやす荘)の包括職員として活動。高齢者の現状把握。高齢者にとって、変わらない生活が大切に思えた。避難所の生活はストレスにつながる。準備しておくべきこととして、機能的な活動、情報の集約、近隣や知人とのつながりが防災の観点からも大切だと感じた。

Q1：障がいのある方の被災地での様子はどうでしたか？

A：避難所では実際に目にすることはありませんでしたが、別の部屋が用意されていました。他人に迷惑をかけたくないという思いから、テントや車、赤い紙が貼られている家(危険な家)など多少リスクがあっても自分の家で生活されているようでした。

Q2：福祉避難所の設定はされていましたか？

A：ひろやす荘は福祉避難所になっていました(地盤がずれていたが、まだ被害は少ない方だった)。施設内に段ボールベッドの部屋ができていました。

Q3：写真撮影がNGだった理由は？

A：日本介護支援専門員協議会から禁止されていました。当事者の気持ちを汲んでだと思えます。

◆益城町災害ボランティアセンター立ち上げまでの状況◆

4月14日(木)午後11時、益城町災害対策本部設置。
益城町社会福祉協議会(益城町社協)に災害ボランティアセンター立ち上げの依頼。準備をしていた矢先に2度目の大きな地震が来た。その後、益城町社協は、全国からの支援を受け4月22日(金)に井関農機グラウンドに災害ボランティアセンターを立ち上げた。



益城町災害ボランティアセンター運営支援

佐倉市社会福祉協議会
佐倉市ボランティアセンター
細谷聡美さん

社会福祉協議会のネットワークにより、被災した市町村の災害ボランティアセンターの運営を支援。全国から駆け付けたボランティアの人達を活動につなげる運営側のスタッフとして参加。千葉県からは5名(千葉市、流山市、富津市、匝瑳市、佐倉市)のチームで7月13日(水)~17日(日)の5日間派遣。関東ブロック同士で業務の引継ぎを行っている。

災害ボランティアセンターの1日の流れ

7:30 朝礼
8:30 ボランティア受付開始
↓
16:00 ボランティア活動終了
16:30 リーダーミーティング
17:00 終礼

- ① **受付** 受付票記入、保険加入の確認
- ② **オリエンテーション** 注意事項の説明、心構え
- ③ **活動(瓦礫の撤去、家屋内の清掃など)のマッチング**
- ④ **グルーピング** 活動ごとにグループになる。(活動の詳細・活動先までの道順[地図]の説明)
※必ずグループで活動する。
- ⑤ **資材の受け渡し** 資材の説明(必ず持ち帰る、個数の確認)
- ⑥ **活動** 災害ボランティアセンターから派遣されていることを証明する証明書を持って行ってもらおう。
- ⑦ **活動報告** ボランティアから現地の情報を収集する。

ニーズ班の運営 ニーズ受付(9:00~16:00)

被災地の方からボランティアにして欲しいことを受ける仕事。

災害ボランティアセンター専用の携帯電話で対応。

落ちてしまった瓦を集積所に運ぶ依頼が一番多く、時期的に仮設住宅への引っ越しの依頼もあった。大変だったことは、方言が難しいこと、土地勘がなく地名が浮かばなかったこと。

遠慮がちになる方が多いので、ニーズをどこまで汲みあげていけるかが私たちの仕事と思った。

——ボランティアの皆さんに——

まずは自分の身と家族の安全が第1です。次に近所の安全。ボランティアをしている人は、何とか自分のことは自分でやらなきゃと思ってしまう人が多いですが、無理をせず、抱え込まずに「助けてほしい」と声をあげてください。ニーズがないと全国からボランティアが集まって来ても仕事がなく帰るということが被災地ではあります。助けてほしい時は、遠慮せずに声をあげて欲しいです。

そして身のまわりが落ち着いたら、ぜひ災害ボランティアセンターに協力してください。瓦礫の撤去だけがボランティアでなく、日頃活動していること、避難所での傾聴、手の回らない環境整備、手話・要約筆記を通して情報発信、子どもたちに出し物をして気持ちをやわらいでもらう、自分の家の周りの情報(こういう方がいるよ)を提供するなど災害時でも貴重な活動です。ぜひご協力をお願い致します。

<アンケートより抜粋>

- ・話を聞いて、自分がその場にいる気持ちになった。
- ・災害ボランティアの様子がよくわかった。
- ・災害ボランティアセンターの仕事内容がよくわかった。
- ・杉山さんと細谷さんが少し違う立場で参加された熊本地震ボランティアのお話を聞けてためになった。
- ・身近な方々の生のお話を聞けて良かった。社協の役割とボラの両方の視点があり、お話も重みがあった。